



ドイツ民謡の収集と研究について - 研究資料・編訳 : ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学 - 民俗学中央研究所 ヘルマン・シュトローク ハ「ドイツ民衆文芸入門」・歌曲 (1. 収集と研究) - ?

その他 (別言語等) のタイトル	Sammeltätigkeit und Erforschung der deutschen Volksdichtung Übersetzung aus dem Buch: "Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung" (Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig: Verlag Philipp jun. 1979)
著者	坂西 八郎
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	35
ページ	61-80
発行年	1985-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/1124

ドイツ民謡の収集と研究について

-研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・
ベルリン科学アカデミー・歴史学—民俗
学中央研究所 ヘルマン・シュトロバ
ハ「ドイツ民衆文芸入門」・歌曲（1.
収集と研究）-

Ⅲ

坂 西 八 郎

Sammeltätigkeit und Erforschung der deutschen Volksdichtung^{*)}

Übersetzung aus dem Buch:

„Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“

(Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig: Verlag

Philipp jun. 1979)

Hachirō Sakanishi

Abstract

There have been many standpoints from which to observe the phenomena of folklore. Hermann Strobach from the standpoint of Marxism analyzes the relationship between social development and folklore. He finds that the creative activity of the people is the most important moment for the formation of the variations in the field of “oral tradition”.

*) This paper is a translation from the book : Deutsche Volksdichtung (ed. : Hermann Strobach Leipzig : Verlag Philipp Reclam jun. 1979)

1). ヘルダーの民謡・民衆観と国民文学

「民謡」という概念は、この概念によって特徴づけられる現象よりは本質的にあたらしい。というのはこの概念を鑄造したのはヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーで、これは18世紀の70年代はじめてになってからのことである。ヘルダーの基本的立場をみれば、かれが民謡をどう理解していたのかはわかる。かれの言葉によれば、その立場は「思弁によるよりも行動により教育された」人びと、かれにとって「尊敬する大部分の大衆」との間柄に根ざしている*。ヘルダーはある社会的諸勢力を想定した。この勢力が-そもそもヘルダーの感化を受けて- 発達しつつある革命的な時代意識を理解し、その勢力のなかのブルジョアジーが主導して封建的絶対主義勢力に反対し、国民を形成することをねがった。このような社会的勢力全体のなかに勤労者の諸層、つまり民衆を編入すること、ヘルダーの民衆概念の歴史的意義は、さまざまな曖昧さにもかかわらず、ここにある。ここしばらく、「人びとが目覚めてうまれかわる、という考え以外、わたしをはげましくごかしたものはない」**、とかれは言っている。当時18世紀の最後の三分の一、社会は進歩し、封建的諸関係を克服して市民国家を形成することが必要であった。民衆に目をむけることは、ヘルダーにとって、こうしたことのための必要な条件であった。「われわれが民衆をもたず、公衆をもたず、国民をもたず、われわれのものであり、われわれの内にあって生き働く言葉と詩芸術をもたなければ、すべてはこのまま永久にかわらない」***ヘルダーはこの過程において文学におおきな意義をあたえた。文学は、もし歴史的課題をはたそうとするならば、民衆に関係しかつ民衆的でなければならない。あるいは「古典的な気泡」****でなければならない。かく

*) Herder の引用は「ヘルダー全集」(Suphan 版), Bd. 5, S. 182 および S. 200.

また Hermann Strobach, Herders Volksliedbegriff. Geschichtliche und gegenwärtige Bedeutung, in: Jahrbuch für Volkskunde und Kulurgeschichte, N. F. 6, 1978, S. 9~55.

**) 同全集, Bd. 28, S. 556.

***) 同全集, Bd. 9, S. 529.

****) Klassische Luftblase, 同個所.

てヘルダーは民衆にむすびついた現実的な国民文学のプログラムを展開する。かれの見解によれば、この国民文学は民衆の歴史と生活にむすびつき、自国民の伝統に立脚しているときにのみ生じうるのである。かれは丁度このようなプログラムが自分の世紀の支配的な文学のなかにあるとはおもわなかった。かれの時代の文学は「国民という幹から芽のごとく生じたもの」*ではなく、他の諸民族の模範をまねていた。とくに、絶対主義の方向を目指していたフランス古典主義の模範と、具体的な歴史的生活諸条件から離れて抽象的な規範によって絶対化されたギリシャ・古代の詩という模範をまねていた。しかし英文学のなかならば、詩芸術にもとめるこの民衆との密接な関連を確認できる、とヘルダーはおもった。これは「自国民自身に根ざし、国民によって書かれ、民族の信仰と趣好、昔からの遺産にもとづいて形成された」文学である。「これによりイギリス人の詩芸術と言葉は国民のものとなった。民族の声はもちいられ重ぜられている」**と。

2). 模範としての英文学

英詩、なかんづくシェクスピアの詩と「民族の声」をそのように重視する状況を通じ、ヘルダーは民族のポエズー観と創造すべきドイツの国民文学にとってふかい鼓舞となるものをイギリスから知った。ヘルダーは、「オシアンと古代民族のうたにかんする往復書簡抜粋」-ここにはじめて「民謡」という概念があらわれた-という論文を、1771年に執筆して1773年に刊行した冊子「ドイツ人の本性と芸術」のなかに発表した。この論文と、1777年に発表した小論文「中程度の英語とドイツ語の詩芸術の相似について」のなかで、ヘルダーがこうした考え方を被露したことは、特徴的なことである。1760年にスコットランドの詩人ジェームス・マクファースンは、「古代詩の断片」をガリア地方の盲目のバルデ詩人オシアンの歌唱として出版した。これらはもともとわりとあたらしいスコットランドの伝承をもとにしたもので、マクファースンが創作し

*) 同全集, Bd. 9, S. 529.

**) 同箇所.

たものであることが明らかになった。5年のちにイギリスの牧師トーマス・ペルスィーが「古代英詩の遺物」をもってこれにつづく。これは3巻本のイギリスのパラード集で、とくに15世紀から16世紀までの古いものである。大部分は1650年頃に編集された原稿による。ペルスィーはこのパラードに手をくわえ、さらに後の時代の英詩人の数編の作品をくわえたのであった。

3). 古い民謡の収集

イギリスの模範に勇気づけられて、ヘルダーは熱心にドイツの歌謡をあつめることをよびかけた。「ドイツの祖国愛が、たとえ灰と泥にまみれようとそこには火種となってくすぶっているであろう」、*と。当代の詩にあっては、この「国民的な考え方」は広い範囲にわたり生き埋めにされているとおもったので、かれは前世紀の歌謡のなかにこれをもとめた。そしてかれは、芸術と民衆の伝承が今ほどおおきくかけはなれることのなかった昔の時代の詩をあつかった。17世紀中葉以後、後期封建主義的絶対主義のおよぶ範囲のなかで、またその影響により、このかけはなれ現象が生じたのである。同時にかれは、この「今生きている姿の民謡の名残」**にある民衆の「考え方や感じ方」を、町や田舎、「小路や魚市場で、民衆が教育をうけないやり方でうたいあっているなか」***にさがしだすことを要求した。自国民がかれにとっては全人類の一部であったように、かれの視野は自国の民衆のみに限定されてはいはしない。「オシアン、野蛮人の、奴隷のうた。ロマンツェ、田舎の詩などは、われわれをより良い軌道にのせてくれるのではなかろうか」、とオシアン論の結論にのべられている。****

*) 同全集, Bd. 25, S. 7.

**) 同個所

***) 同全集, Bd. 5, S. 189.

****) 同全集, Bd. 5, S. 203.

4). ハーマンの影響

すでにリガ時代の1764年から1769年まで、ヘルダーはケーニヒスベルクの先生ゲオルク・ハーマンから影響をうけ、レット人農民の歌唱を研究した。以来かれは文献によって、民衆のうたや「教育によってそこなわれていない」民衆の歌唱についての報告を、入手しうるかぎりあつめた。北欧古代スカンジナビアの吟唱詩人の詩、レット人の、リトワニア人の、ラブラント人の愛の小曲、そして最後にはアメリカ・インディアンの歌謡その他もあつめた。

5). モンテーニュの影響

ここに16世紀アメリカ原住民のポエズィーの発見者たちにさかのぼる一本の線がある。フランス人の哲学者ミシェル・ドゥ・モンテーニュは1580年に「エッセイ」のなかで、一つのブラジルのうたを報告し、その詩的な美しさをヨーロッパ人の芸術詩と比較したのみではなく、自分の国の民謡、ガスコーニュのヴィラネラのうたを想起している。かれはブラジルの例から推論して、学問も文字も知らない民族のなかにもポエズィーは存在するとのべている。おなじ考え方をおなじ頃イギリス人のフィリップ・シドニーは「詩の防衛」のなかでくわしくのべた。すぐ後1609年、スペイン士官とインカ族出身のペルー婦人とのあいだにうまれたガルシラソ・ドゥ・ラ・ヴェーガは、インカ帝国とペルー人の征服の叙述のなかで、二つのペルーの歌謡を報告している。

6). 諸民族のうたについての関心

ヘルダーは、これらすべての提起をうけいれ、ひきつづきおこなった民謡研究に関連する自分の見解の全体の中にとりいれた。1773年、かれは「古い民謡」の印刷原稿をまとめたが、これは4巻のうち数編のドイツのうたとともに、イギリスのバラード、シェークスピアのうた、ソルブ、リトワニア、レット、エストニア、ラブラント、グリーンランド、アイスランドおよび古代スカンジナビアの吟遊詩人たちのうたをふくんでいる。印刷工程の遅延と面倒さ

のため、また自分の民謡論にたいして攻撃がはじまったため、かれは民謡集をひっこめる気になった。論文「英国とドイツの平均的な詩芸術の相似について」によせた序文をかれは書きかえた。やつと1778年から1779年にかけて民謡集は二部編成で、「民謡集」と題してライプツィヒから出版された。これにとりあげられたうたの量はいちじるしくふえた。とくに最初の原稿ではみられなかったデンマーク、フランス、イタリア、ギリシアその他の民族のうたがふえたのであった。「古い民謡」の民族学的整理は断念された。そのかわり美学的諸観点が読者を考慮して前面にでてきた。テキストはおおくの点でより慎重にひかえめになり、またある部分は委細もらさぬという忍耐づよさで書かれている。シェクスピアの歌謡もとりあげられた。しかしいまやゲーテやマティエース・クラウディウスなど、同時代のドイツの詩もそえられてある。

7). ヘルダーの民謡概念

こうして民謡とは、ヘルダーにとっては -民族の本性、考え方、国民的特性、そしてまたこれらをむすびつける自然的- 人間的なものであった。歴史的・具体的な姿で特徴的に表現する、そのようなものであった。「諸民族の生きている声、人間そのものの声」*であった。そのようなうたは民衆のなかから生じえたか、あるいは民衆とむすびつき、国民としての自覚をもった詩人たちによって創作されうるのである。ホメロスとダンテをかれは最大の「民衆詩人」となづけた。ここに、かれが発展・進歩の可能性をもみとめたことは、かれがマティエース・クラウディウスの夕べのうたに付した注をみればわかる。かれはその注を「最上の民衆とはどのような内容をもつのか、そしてもちつづけうるのか暗示するため」、**民謡集にとりいれた。

*) 同全集, Bd. 24, S. 226.

**) 同全集, Bd. 25, S. 544.

8). 概念の具体的内容

i) 美学的・文学的観点

民謡の本質にかんするこの考え方からする論理的帰結として、ヘルダーは、そのようなポエズイーはとくに生き生きとつよく、以下のうたのなかに実現されているとおもった。まず、15世紀と16世紀のドイツにおける初期のブルジョアの高揚期のうた、それから「むしろ働らくことを通じてよりつよく」教育された自国や他国の素朴な人びとのうた、そしてまたとくに対立的階級関係や分業の展開が充分に醸成される以前、社会的発展の初期の歴史的段階にある諸国民の歌謡財のなかなどに実現されているとおもった。これらの民族、また自国民族の素朴な人びとのうたは、そのまま人間の歴史、生活、ものの見方とむすびついているようにおもえた。これらの民族の文化の段階ないしは階級や社会層の文化の段階に照応し、うたは主として口頭伝承により伝達された。だからヘルダーによってとくに重ぜられた標識、対比・繰りかえし形式・跳躍・投げかけ・逆転などの点で秀でている。かれはルターやクロップシュトックや他の詩人の詩についてもこの点をほめている。これらの視点のなかに、かれの民謡観の美学的・文学的な諸相がうかがえる。民衆にむすびついた、生活に即した文学の模範として、さまざまな民族の伝承のなかから最上のものがえらびだされなければならなかった。形式の点で、言いまわしの点で、言葉の点で表面的に模倣するためのみならず、「うたの内部の精神・内部の翻案」*がそこからまなばれうるのである。それにより「われわれの時代のものが、われわれのために、まことに自然に、高貴な簡潔さをもって、投げかけと進行」をもってうたわれうるであろう。「これらの民謡が、その時代のためにうたっていたように」。**だから、かれにとっての重要事は、より昔の時代にかえること、また単なる再生やものまねではなく、自国民や人類の歴史からもっとも価値あるも

*) 同全集, Bd. 5, S. 332. 原文 innerer Geist...

**) 同全集, Bd. 25, S. 12.

のを生産的にとりあげて発展させることであった。

ii) 文化史的・民族学的観点

ヘルダーの民謡観にとっておなじく重要であったのは、文化史的・民族学的観点であった。さまざまな国民のポエズイー、うたや「民話、童話、神話」は、人びとが歴史をただ「頭の生理学」として認識するのではなく、「ものの考え方や肉体の陶冶の歴史」として認識するために力を貸さなければならない。***この学問的課題のために、かれはすでに研究者に方法的プログラムを指示した。これが実現されうするためにはなおながい時間またなければならなかったし、このプログラムは今日もなお通用する。「諸民族のうたはあるがままになければならない。原語のままで、とはいえ充分な説明をつけて、批難されず、さりとて美化もされず、できるだけ旋律とともに民衆の生活に属するすべてとともに」****、という言葉は今日も通用する。民衆の伝承と生活の現実にたいする市民的ヒューマニストのこの正直な見方は、民衆文芸における諸機能をもみのがしはしなかった。それはエストニアの「圧政をうったえる農奴のうた」をかれが「民謡集」のなかにとりいれたことからわかる。そしてかれのコメント、とくにかれの「献辞」(1803年印刷)からもよくわかる。かれは死の直前に、あらたにうたの量をふやし、かつおなじように民族学的な観点をふまえ整理をした民謡集の出版を計画したが、そのときにこの「献辞」を書いたのであった。

9). ゲーテにたいする影響

ヘルダーの理念は、同時代の人びとのうちでも、ゲーテにたいしてもっとも持続的にゆたかな作用をあたえることになった。ブルジョア的研究文献では、しばしばヘルダーとゲーテの民謡概念を対立的にえがきだす。^{*}しかしすべての本質的な点で、ゲーテの民謡観とヘルダーの民謡観とは充分に一致する。

***) 同全集, Bd. 25, S. 65.

****) 同全集, Bd. 9, S. 533.

*) Paul Levy, Geschichte des Begriffes Volkslied, Berlin 1911.

ゲーテもまた生涯にわたり民謡をとりあつかった。ゲーテの視野もヘルダーと同じく世界的ひろがりを持ち、自国と他国の伝承を俯瞰した。ヘルダーにとってもそうであったように、ゲーテにとっても、民衆のうたは民衆の生活と個性のあらわれである。それが民衆のなかから生じようと、「秀でた個人」によって創作されたものであろうと。 **ゲーテはこの民謡の「由来問題」で - とくに「少年の魔法の角笛」書評で- すこし強調しつつうたの民衆外的発展を書いたとしても、それはその頃目立った神秘的・ロマン主義的諸観念に反対するものであった。民衆とその精神的・文化的創造力にたいする関係の決定的な点を、かれはヘルダーから熱心にとりいれた。盲目的に民謡を理想化はしない詳細な観察が、かれをヘルダーにむすびつけている。とくにかれはヘルダーによって、シュトラースブルク滞在時代に民謡収集の刺激をうけた。エルザスでかれはドイツのバラードを記録した。それをかれは1771年にヘルダーにおくり、ヘルダーはこれを民謡集にとりいれた。

10). ビュルガーにたいする影響

ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーもそのころ民間伝承と、とくに故郷ハルツ地方の民話にもとづき、民謡風バラードを創作した（もっとも知られたるものは「レノーレ」）。かれは熱狂的にヘルダーの唱導をとりあげ、1776年にあらわした論文「民衆のポエズィーにたいする心からの挨拶」に「ダーニエル・ヴンダーリヒの本から」と題して書いている。しかしヘルダーの民謡観のごとき歴史的で詳細な具体性をもって仕事をやりとおしたわけではなかった。

11). 否定的なニコライの立場

その直後、標題からみるとビュルガーに反対していることがわかるが、ベルリンの作家・出版家フリードリヒ・ニコライは、1777年と1778年に、二冊本の民謡集「すばらしい小年鑑、美しい、真に愛らしい民謡集…、デッサウの街道

** *) Goethe, Dichtung und Wahrheit. 10. Buch; Goethe, Werke, Weimarer Ausgabe I, 42, 1, S. 306 - 307; I, 37, S. 229 f.

歌師ガブリエル・ヴンダーリヒによりうたわる」を出版した。この題の付し方からも、またとくに序言と本の内容からも、この本は興隆してきた民謡熱を引きおろそうという冷笑的な風刺であったであろう。この年鑑は、16世紀の「鉾山歌集」を消化して生かしたものである。ヘルダーが「英国とドイツの平均的な詩芸術の相似」の論文のなかで痛烈にのべているごとく「泥を一杯にもりこんであるが」、ドイツ民謡のはじめての、そして重要な部分の一つである。しかし風刺的・意図的な「どぶ川の民謡」との混合や、民謡集に付した序文は、ヘルダーの市民的・進歩的基本構想に反対するのを目的としていた。ヘルダーは民衆を尊重し、民衆にむすびついた創造すべき市民的国民文学にとって、民謡は重要な意義をもつもの、としていた。争点は、(民謡が)ブルジョアの啓蒙より出発し、民衆にむすびついた民主的なさまざまな立場に発展しようとするものか否か、である。もちろん改革はもとめようとするものの、社会組織としての絶対主義は問題にはしない、という穏健な啓蒙的立場から斗争がいどまれている。レッシングは、この民謡集に参画することをニコライから要請されたが拒否した。1777年9月20日にしたための返書で、かれはちょうどこの核心をついている。かれはヘルダーとおなじ考えで、「(価値ある民謡)を賞揚することは、きわめて重要なこと」であろう。「しかし、あなたはまさに事の重要さを風刺している…。すべての風刺は烏合の衆と民衆をとりちがえることになっている」、とのべている。

12). ヘルダーから「少年の魔法の角笛」へ

ヘルダーは、1778年と1779年に民謡集を出版したが、これはニコライの「年鑑」にたいする答えでもあった。だがヘルダーの民謡集が提供するドイツ民謡の量はまだすくなくすぎたから、ドイツ民謡がいかに豊かで多様性に富むものであるか、この書は読者に正しい想像をあたえることはできなかった。しかし民謡にたいする関心を持続的にひきおこすことはできた。文学・美学・音楽理論のうえのディスカッションにおいて、この書は以後一つの結節点をなした。しかしドイツにおける収集活動はそれから何十年かあとになって、ためら

いながらゆっくりとすすんだ。年鑑で、新聞と雑誌で、ばらばらに個々の作品がとりあげられた。そのうち挙げるべきものは、フリードリッヒ・ダーヴィド・グレーター・の「ブラゲーア」である。ヘルダーの本のまる30年あと、アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノが、この分野におけるおおきな仕事、3巻の民謡集「少年の魔法の角笛」を公にした（1806～1808年）。かれらがヘルダーの民謡観をうけつぎ、ヘルダーの要請をうけいれていることははっきりしている。かれらはとくに16世紀と17世紀にひろまっていたうたに注目し、印刷文献を典拠にして創作をおこなった。そのうえかれらは民衆に知られていなかったこの時代の無数のドイツ抒情詩をとりあげた。だが比較的あたらしい作品や自分自身のいくつかの作品もとりにれた。かれらは民衆のなかにいきている歌謡、友人と援助者によってあつめられたうたをはじめて再現した。その大部分は手をくわえた、そして恣意的に加工された形のうたではあったが。

13). 「角笛」とその後の諸民謡集の刊行

ヘルダーの世界的視野とくらべると、この本の視野は、ドイツの歌謡財のみにむけられていた。国民的であろうという理念が「角笛」の構想をきめている。編者たちはナポレオンのドイツ占領時代に国民的伝統の一例をしめし、国民を団結させる文化的遺産を紹介して国民的自覚をよびさまそうとしたのであった。ついでこの国民的であろうという理念には、明確に反封建主義を強調しているヘルダーの市民的民主主義の立場とはことなり、社会的対立に目をつむる傾向、つまりドイツ・ロマンティクのイデオロギーが表現されている。これによりナポレオンの外国支配に反抗し対抗するきわめて愛国的な熱狂をかきたてることはもちろんできたが、18世紀の後半におけるもっとも進歩的な市民的諸勢力のもっていた、つよい反封建的国民意識を発展させようとする志向にとつては、後退を意味した。これに関連して第三に、その副題がしめすごとく、「古いドイツのうた」をよびもどそうとしているが、これは意識的なうしろむきの解釈とむすびついている。この歌集における「古いドイツの変遷」*の反

映を「角笛」の編者たちは「あたらしいもののつむじ風」**と「あたらしい時代とその主義が暴力的におしよせてくること」***をふせぐ遮蔽と評価した。二人のロマン主義者は、反対すべきこの「あたらしいもの」がフランス革命中のできごとやその成果のなかに体现されているとおもった。アヒム・フォン・アルニムは直接これをくわしく論じている。また民衆の生活条件と生活方法にたいしてあたえる資本主義の作用、つまり「家父長的、田園的關係」****や人間的個性が、資本主義的疎外と労働の分化によって破壊されること、ここに「あたらしいもの」が具体的にあらわれているとおもった。この疎外と労働分化は、英国やフランスなどのすすんだ国にも、またドイツ領土にも、昔のヘルダーの時代とくらべよりはっきりと現象となってあらわれてきた。こうして「魔法の角笛」編者の民謡観は、大部分のドイツ知識人の矛盾にみちた意識、つまりあたらしい歴史的段階において、社会的進歩の道とその内容にたいして態度をしめすことを要求されたドイツ知識人の意識、これを反映している。フランス革命は勝利した。しかしドイツの諸関係はブルジョア的・資本主義的転換への革命的移行ということでは十分に成熟していなかった。くわえてナポレオンは独裁をおこない、膨脹政策をとっているという印象をあたえていたのであった。

同時代の、あるいはまたそれにひきつづく民謡研究も-資料のあつかい方にたいして異論をとなえている研究すら-「角笛」から決定的な影響をうけた。とくに「ふるい」歌謡財をもとめる志向は、なおながいあいだ決定的なものであった。いまや地方地方ではじまった「生きている」民間伝承を収集することも、「ふるい」うたをこのんだ。その大部分は、15世紀と16世紀のドイツのう

*) Achim von Arnim, Nachschrift an den Leser; in: Des Knaben Wunderhorn, I. Teil, Heidelberg 1806, S. 474.

**) 同, Von Volksliedern, 同書 S. 438.

**) Clemens Brentano, Zirkular von 1806; R. Steig および W. Grimm: Achim von Arnim und die ihm nahestanden, Bd. 1: Achim von Arnim und Clemens Brentano, Berlin 1894, S. 177.

****) Karl Marx und Friedrich Engels, Manifest der Kommunistischen Partei; in: Marx/Engels, Werke, Bd. 4, S. 464.

たに特徴的なジャンルと題材である。ヨーゼフ・ゲオルク・マイナートの包括的なはじめての地方民謡集は、クールレントヒェンの方言で「古いドイツの民謡」を提供した（1817年）。このやり方は、根本的にルイ・ピンクの編んだロートリンゲン地方の「消える曲」（5巻、1926年 - 1962年）までつづき、たいていの似た企画の地方民謡集までつづいている。

歴史的研究が民謡の文学的再生とますますいれかわっていった。1844年と1845年に、ルートヴィヒ・ウーラントは「古高地・低地民謡集」を出版した。かれはこの書を「道徳的なあるいは美的な模範的民謡集ではなくて、ドイツの民衆生活の歴史への寄与」*としたかった。このことをかれは序文で強調している。ひろい範囲にわたる問題をあつかった論文をかれはいくつか載せているが、そこでかれは自分の歴史的知識を展開している。またくわえて、かれは30年代に構想をたて、やっと1845年に完成した序文のなかで民謡にかんする諸観念をのべ、民謡史を概括している。かれの典拠は、主として16世紀の印刷されたか、あるいは手稿のままの民謡集、ピラかあるいは個人の収集であった。ほんの僅かな「比較的ふるいスタイルの作品」**をかれは当時の口頭伝承からとりいれた。しかしまたふるい歌謡財からもえらびだした。しかも様式と美学のうえからみて、単純・素朴ということを標識にしたのであった。うたは主として口頭 - 記憶伝承によるから伝承過程でそこなわれはしまいか、「真なるものが削りとられ」はしまいか、その点を注意ぶかくみてそのようなものを除去していった。かれはこうした批判・選択的なやり方によって原型を創出しようとした - 「民謡をその眞の要素に還元する」***こと。伝承に対抗して歴史学・文献学的忠実さをめざす熱烈な信仰告白にもかかわらず、この民謡集には「ポエーティッシュ（詩的）な時代」の構成が宣言されている。ウーラントはこの時代を、ドイツにおける初期市民革命に通ずる、かつその文化的影響の支

*) Ludwig Uhland, Alte hoch- und niederdeutsche Volkslieder, hrsg. von Hermann Fischer, Bd. 1. Stuttgart und Berlin o. J., S. 13.

**) 同書, Bd. 2, S. 262.

***) 同書, S. 263 f.

配する時代、と詩的に神聖化した。「封建的騎士階級の支配のもっとも輝ける時代はおわり、蘇生した民衆歌唱と…歩をあわせ、市民階級の、地方によっては農民階級の自覚がつよくなって」いったというのである。ウーラントによれば、この時期に花をひらく民謡は一つの全体をなし、そこに一つの音調が貫通する。精神は解放され、「さまざまに分かれた身分階級が国民として一つにあつまり、理解しあう」*。

14). ウーラントの立場の変遷

ここでは歴史的認識と幻想がまざりあっている。三月前期にはドイツの市民階級の経済的基盤は、工業革命の前進によって急速につよまり、階級対立はするどくなった。その時期にウーラントの作品は、ドイツのブルジョアの階級発展の初期の重要な文化遺産、そして反封建運動のはじめの時期の文化遺産をおさめている。このころかれは、まだなお民主的・進歩的な、市民的国民といった統一的単位の前進を強調する幻想をもってこの遺産を受容していた。だが1848年以降、この受容の態度は変化し、国粋主義的性格がきわだってきた。そしてリーリエンクローンの「1530年頃のうたにおけるドイツの生活」(1884年)もおなじ態度をとるようになった。「ツップ・ガイゲン・ハンスル」(1909年)の青少年運動は、とくにこのふるい歌謡財にたちかえたものだが、さらに社会の帝国主義的發展に背をむけた小市民の反応を表現する形式として役立った。

15). 三革命の時代と民謡集

ウーラントの時代には、この進歩的な市民的民主主義にきわだってあらわれた進歩的傾向が広範囲に形成され、ふるいドイツのうたの評価と、ウーラントに近親して市民的民主的であるという基本的立場が民謡研究に形をあたえた。

*) Uhlands Schriften zur Geschichte der Dichtung und Sage, Bd. 3, Stuttgart 1866, S. 4.

三月前期と1848年の革命の政治的發展とあきらかにむすびついて、とくに19世紀の中葉おびただしい地方民謡集が発生した。市民的愛国主義者ホフマン・フォン・ファラースレーベンは、1842年「シュレーズィエンの民謡」を刊行した。15世紀ないし17世紀のうたも出版された。ルートヴィヒ・エルクは、もっとも成果をおさめた19世紀の収集家で、二万曲をこえる記録がのこされている。かれの仕事そのものは、1864年の出来ごととむすびついている。ルートヴィヒ・パリール・ズィウスは、1864年に民主的な態度をとったため郡司法官の職を去らされたが、50年代にアルトマルクで収集をおこなった。フランツ・ウィルヘルム・フライヘル・フォン・デイトフルトの「フランケンの民謡集」(1855年)もまた、かれのおおくの歌集ともども反封建的歌謡財とあまたの「歴史的民謡」をおさめている。かれは16世紀と17世紀の歌謡財の研究に没頭したのであった。

16). ドイツの帝国主義的發展と民謡集

ドイツのさまざまな状況にとって特徴的である反動的なユンカー的・プロイセンの軍国主義と融合しつつ、資本主義的な生産関係と社会関係が完全に貫徹してゆくのにともない、とくに世紀のかわりめにおける帝国主義的段階への移行にさいしては、民謡研究にも反動的で反民主主義的な、排外的なさまざまな傾向が発生した。その特徴として三巻の「ドイツの歌の宝」をあげることができよう。これはフランツ・マグヌス・ボエーメが、エルクの収集・刊行をもとに1893年 - 1894年に刊行したものである。それまでおこなわれた収集成果の編集・刊行で、なお依然としてドイツ民謡のもっとも包括的な出版物である。この書では、ただ単におおくの学問的になげやりなやり方がびりついているというだけではなく、反体制的・反軍国主義的歌謡財を意識的に抑圧し、伝承を直接改悪することがおこなわれている。無数のドイツ民謡集が、とくに1900年以降、反動的・排外的な、直接的に帝国主義的戦争準備に幾重にも役にたつドイツ民謡像の改悪に寄与した。1908年にあらわされた二冊のハントブーフ、オットー・シェルの「民謡」とオットー・ボエッケルの「ドイツ民謡ハントブーフ」

フ」にはじまり、かつての東ヨーロッパのドイツ植民地域やドイツ言語語島地域の、とくに20年代、30年代における収集にいたるまで、-重要なふるい伝承歌謡財の本質的部分をもたらしたとはいえ- すべてますます排外主義的志向をおび、ファシズムの時代にはついに公然と人種政策の諸目的に役にたつものにさせられた。

17). あたらしい民謡観の発展

世紀のかわりころの発展にとって特徴的なこととなったのは、あたらしい民謡観が普及したことでもあった。ブルジョアの書物ではこの民謡観の普及ということは、学問に内在的な事態の進行だけに帰せられる。地方でおこなわれている歌唱をおさめた一般の民謡集が増加したこと、とくに前世紀90年代に地方とむすびついた民俗協会や民俗学会が設立され、-とくに田舎では、その時代にうたわれていた歌謡財の収集がふえた。よりふるいうたはレパートリーとしては僅少となり、大部分は18世紀、19世紀の第二、第三級の詩人のうたであることがわかる。

18). ジョン・マイアーの「受容説」

ジョン・マイアーは、「ドイツの芸術歌曲と民謡」と「民衆の口にうたわれる芸術歌曲」(両者とも1906年)の二書において、この認識を一般化した。かれは歌謡財の一つ一つの由来を重視して民謡概念を構築し、民謡をまず(民衆により)拾いあげられた芸術歌曲(受容説)とした。これは民衆のなかにひろまるとき、一人一人の著作権や作者は無視される、という(民衆が主人公である)「支配関係」にもとづき、音楽的・歌詞的な姿はつねに変化する。しかしこの民謡観の核心には、民衆は精神的に非創造的であるというテーゼがある。かれは各所で以下のごとくのべている、「民衆、すなわち国民の下層は、純粹に時間的发展についていえば、つねにあとからついてくる。精神王国のテーブ

*) John Meier, Kunstlieder im Volksmunde, Halle 1906, S. XII ~ XIII.

ルからおちこぼれた残りかすで生きていくのだ」。^{*}ここには、ただ文献学のうえでの成果が一般化されているばかりではないことがあきらかにわかる。帝国主義の完成段階において、広範な民衆層の水準を奇形なものにする資本主義の影響力を絶対化する民衆観がむしろ表現されている。しかも革命的な労働者階級の戦斗的な文化運動が、これにたいして積極的に反対したという傾向を無視している。これは反動的・エリート的な、客観的には帝国主義的ブルジョアジーの利益を反映する民衆概念へとゆきつく。この概念は、広範な民衆層の文化的悲慘さの責任を、民衆を支配する社会組織ではなく、組織そのものの犠牲者へと転化する。1918年以降ハンス・ナウマンはこのような民謡概念の基礎のうえに、民衆を軽蔑する沈降文化財理論を一般化した。^{**}

19). 「ドイツ民謡文庫」の設立と活動の展開

ジョン・マイアーは、文献学的研究をすすめたが、とくに1914年以降ブライスガウのフライブルフに「ドイツ民謡文庫」を設立し、これによりドイツ民謡の研究に重要な功績をのこした。この文庫は今日まで三十万編以上の歌謡の記録をあつめているが、マイアーは収集につくし - その一部はマイアーの理論と対立するものであるが - とくに民謡の歴史的研究に功績をのこした。マイアーはのち、自分の一面的な立場からはなれ、ふたたびつよく、まさにこの伝承における民衆の創造的能力を強調した。だが受容的側面を強調した民謡概念ははじめ広範囲に影響をおよぼしたので、これはオーストリア人のヨーゼフ・ボンマーによっておなじく世紀のかわりめに絶対化された民謡観の一面性を代表する創造説にたいしても反対の立場をとった。この創造説は民衆のなかから生じたうただけが民謡であるとしている。この民謡観をおしすすめた帰結は、民謡の決定的な標識としてなりたつものとして、口頭 - 記憶による伝承のみを考えることになる。ジョン・マイアーは、この標識が唯一の正当性をもつという考

^{*} ^{*}) John Heier, Balladen, Teil 1, Leipzig 1935, S. 33~34; 同, Zur Überlieferung eines Testamentsliedes; in: Beiträge zur sprachlichen Volksüberlieferung, Berlin 1953, S. 13.

えに反対はしたが、いわゆる「支配関係」にもとづくかれの伝播・恒常的变化の定義は、結局のところこの標識にかえてゆく。しかもその結果おおくのブルジョア的研究者たちが結局は民謡を「農民のうた」に限定してゆくということが生ずる。すなわち農村にのみ生きているうたである。そしてふたたび、とくにふるい実用歌に限定してゆくことになる。というのも、その当時において、伝承歌謡においてのみうたい替え現象が一般的に構造にかかわる本質的な重要要素とみなされていたからである。シュヴィーテリング学派（シュヴィーテリング、ゴエッティング、プリングマイアー）は、理論的・実践的にこの考えを一貫した。そしてたいていの民謡収集がこの方向をたどったのみではなく、民謡を紹介する仕事ももっぱら農村（たとえばエーリヒ・ゼーマン「民謡」1926年など）に方向を定めている。これとむすびついていたのは、惰性と耐久を特徴とする歴史をもたぬ農民層という亜歴史的教義であり、これにより、歴史的現象としての民謡を具体的にまた歴史的に研究し論述することはむつかしくさせられた。ファシズム前期とファシズム期のイデオロギーにおいて、そのような教義は結局のところ直接的に一つのイデオロギーとして、帝国主義から社会主義に移行する歴史的時期に、学問的理論であるマルクス・レーニン主義と対立せざるをえないことになる。

20). 第二次大戦後の西ドイツの民謡研究

1945年以降、西ドイツの民謡研究は、歩一歩すすんだ独占資本主義の復興との関連において、1933年までブルジョア的研究を本質的に支配してきた計画と方法を継続したのであった。この復興とともに帝国主義的ドイツの社会と歴史の発展という危険なる循環のための全能力が保持されたが、このことはしばしば意識されなかった。民謡そのものおよび民謡研究において、ファシズムの墮落からの転換がはっきりとあらわれているところでは、意識的に社会的基盤を反映しないか、あるいは問題にしない、という実証的・歴史的ファクトロジーへの限定という方向にはもはやすまない。収集と認識における進歩を決定しているのは、長期にわたるブルジョア的民謡研究の歴史によっては幾重に

もためされた確実な文献学的伝統にたいする結合である。この文献学的伝統は、レコード採録のあたらしい補助手段により発展させられた。この方向における収集と研究は、主として「ドイツ民謡文庫」の仕事で、第一にバラード研究に捧げられている（エーリッヒ・ゼーマン、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ、ヴォルフガング・ズッパン）。理論的・方法的にかれらのよってたつ本質的な立場は、最終的に修正されたジョン・マイアーの諸民謡観である。ヴァルター・ヴィオラは、ヘルダーの民謡観のヒューマニスティックな内容を取りあげ、絶対化された受容説の立場を克服しようところみだが、抽象的でうしろむきな・田園的な観念にとらえられていた。40年代のおわりから50年代にかけ、西ドイツではひきつづき反動的・報復的な傾向、いわゆる「亡命した人びと」の民俗学が前面におしだされた。この発展にたいする批判はまず60年代に、学生たちの自由・左翼的反体制的グループよりもちだされた。もちろんこの一部は文化遺産にたいする非歴史的・否定的な態度とむすびついていた。西ドイツの歌謡生活の現代の発展過程にたいする研究は、最近では主としてブルジョア的グループ社会学理論（エルンスト・クルーゼン）の方法によって占められている。これによれば、現実の階級関係は解消され、階級関係に照応した対立は、結局は同格的なグループ関係に「解消」されなければならない。西ドイツの民謡研究に特徴的なすべての傾向が、最近の集団的作品「民謡ハントブーフ」にはっきりと反映している。

21). ドイツ民主共和国の民謡研究

ドイツ民主共和国では、民謡研究の領域の仕事は1945年にはじまった。ヴォルフガング・シュタイニッツは、マルクス主義的民謡研究の基礎をおいた。かれははじめの目的として、民主的で革命的な諸伝統の研究と出版をおこなうことをきめた。これによって、かれはこの領域におけるドイツ民主共和国の社会的発展のあの時期、当時は急を要した社会的・イデオロギ的・文化的・政治

*) H. Strobach, R. Weinhold, B. Weisel, Volkskundliche Forschungen in der DDR; in: Jahrbuch für Volkskunde und Kulturgeschichte 17, N. F. 2 (1974), S. 11 ff., 1855.

的なさまざまな要求にこたえたのであった。*友好的な社会主義国の専門研究所、とくにソビエト連邦の研究所と連携をたもち、そしてその研究経験をまなび、かつとくにかつてのドイツ民主共和国アカデミー・ドイツ民俗学研究所に、現在の歴史学中央研究所文化史・民俗学部門が設立された。ここから民謡研究のテーマに関連する一連の出版物が刊行されている。重点をなしているのは、労働者歌曲の収集と研究であり、そのため1955年にベルリンのドイツ民主共和国アカデミー労働者歌曲文庫に中央研究所が設置された。その資料は5,000曲の労働者歌曲、850冊の労働者歌集、何千点という資料となり、全部で50,000曲の記録となっている。

22). シュタイニッツとマルクス主義民謡観

シュタイニッツは、このマルクス主義的な立場からする研究との関連において、民謡観をもまた発展させた。かれはすべての文化的諸現象の根本的な階級的性格から出発して、民謡を勤労する階級と社会層によってになわれたうたであり、おもに口頭伝承的・集团的伝承を基礎として、つねに変化するうたい替えによって、創造的に形づくられたもの、と規定した。この明確な階級的な民謡概念の規定のなかに、ブルジョアの民謡観を決定的にこえる進歩がある。この民謡観は、ドイツ民主共和国における民謡研究のマルクス主義的な出発点として、方向を決定するものであった。口頭伝承的・記憶的うたい替えを民謡の標識とみなすとともに、この民謡観は初期の歴史的時期における勤労する階級と社会層の歌謡伝承のもつ本質的な、創造的な面をとらえている。創造性と伝承の可能性のあたらしいさまざまな形式とむすびついている進歩的な社会主義革命の過程における勤労人民の文化的活動の一層の発展は、民謡概念の更新と、あるいは生じうるこの概念の拡大の問題を提起する。この更新は、あたらしいさまざまな発端・変化・傾向をうけいれるのである。

(昭和60年5月21日 受理)